



アートとしての教養 アートとしての投資

ビジネスパーソンが身につけたい基礎教養

徳光健治

KENJI TOKUMITSU

みんなが
知りたい！
アートの値段。
10万円で
買った作品は
将来何倍に
なるのか？

「アートの魅力をわかりやすく伝える達人です」

武田双雲

氏推薦

10万円以内で買えるおすすめアーティスト20

深澤雄太(ふかざわ ゆうた) 東京藝術大学在学中。その作品のモチーフはどこにでもある何気ない日常の風景なのだが、彼の腕にかかると鮮やかな色彩に変化してしまう、まさにマジシャン。白黒写真の上に人工的に色をつけた1960年代の総天然色のような味わいをもつが、それは実際には存在しない色合いであり、深澤雄太のフィルターを通してでしか描かれない色彩の世界だ。

小池正典(こいけ まさのり) TDW ART FAIRで見事グランプリを獲得。彼のつくる小さな立体作品それぞれには個別のストーリーが込められている。万物が生まれ、その後形を変えながら滅びていくというその過程を粘土やドローイングで表現している小池は、有田窯業大学校専門課程で学んだ造形物のつくり方によって粘土に魂を注入している。

上床加奈(うわとこ かな) まだ若くアーティストとしての対外的な展示などもほぼ初めてといった新人ながら、その圧倒的な構図のうまさと線の描写の確かさは同世代のアーティストの中でも群を抜く。極めて日本的なモチーフで描いているが、そこには震災を意味するなどコンセプトアルな表現を巧みに作品の中に入れていく。

橋本仁(はしもと じん) 東京藝術大学の修了作品展では東京都知事賞を受賞し、鉄で鍛造された作品は上野恩賜公園に設置された。大学院に進学後も東京藝術大学安宅賞を受賞するなど、その活躍にはめざましいものがある。台北のG.Galleryでの展覧会開催と同時期に、タグポートの主催イベント「Independent台北」でも100名以上の参加者を抑えてまたまたグランプリを獲得した。

足立篤史(あだち あつし) 足立篤史が作品を制作するにあたり、コンセプトの土台としているのは「記憶を記録すること」。主に古い新聞記事を素材に、それまで人間が経験した遠い昔の記憶の中にあるモノを今の時代に表現しようと試みている。

徳永博子(とくなが ひろこ) アクリル板を丁寧に削りながら描く繊細で夢い表情が、なんとも印象的な作品群。それは、幻想的であり決して掴むことのできない利那的な美しさがある一方、幾重にも重なり集合体となることで、敵かで神秘的なオートを纏いながら、永遠を想わせるようなスケール感を放つ。

ホリグチシンゴ 東大寺学園出身でずば抜けた頭脳をもち、多摩美術大学大学院を卒業したばかりの期待の新人。模様の形をそのままキャンバス上に表現するのはなく、写真撮りとパソコンとを経由することで無機質な表層のデータだけを抜き取って描く。独特の世界観は常人の考える域を超え、新しい空間を演出する。

小木曾ウエイツ恭子(こぎそ うえいつ きょうこ) 武蔵野美術大学大学院を修了した後、制作のブランク期間に2人の子どもに恵まれたが、絵を描きたいという衝動はずっともっていた。アーティストであり、母でもあるという小木曾の強さが作品に出ている。ミニマルかつ単純化させる作業の中で、力強さが生まれる作品は色調に味わいがあり、筆さばきも確かな実力をもつ作家である。

あたり あたりは筑波大学大学院に在籍している三隅幸ほか、同筑波大学内で出会った3名で構成されるアート・コレクティブ。彼らはアートとテクノロジーの交差点を極めており、ユニークな見た目は観るものを楽しませるだけでなく、コンセプトと科学的からくりを知ること作家の意図が理解できる。日本初の新しいコンセプトポラリィ・アートのトレンドを生むであろう。

市川詩織(いちかわ しおり) 海外のタブロイド紙に掲載されている風刺画のような雰囲気をもつドローイング・アーティスト。犬などの動物を主役としながらも、人間を対象に皮肉たっぷりにユーモアを交えた表現がある。東京藝術大学現役合格する実力もち主なものだけに、そのセンスと表現する技術は抜群に高い。訴えたいメッセージとそれをユーモラスに描く対象との差が心地よくらい心に響く。

ayaka nakamura(あやか なかむら) 武蔵野美術大学の版画専攻を卒業後、繊細かつ力強い画面づくりを目指し、油画、映像、版画など幅広く制作する。アーティストのミュージックビデオやアートワーク、テレビ番組のアニメーション、装丁のイラストなどを手がける。六本木アートナイトでは幅7mもの巨大なライブペイントを行うなど、イベント出演も得意とする。海外でのレジデンスや展覧会などで実力を発揮し、急成長中の作家のひとりである。

渡辺おさむ(わたなべ おさむ) フェイククリームアートという独自の技法で作家としての道を切り開く渡辺おさむは、アートのクリーム王子という異名がつく程唯一無二の作家として、高い人気を集める。菓子のクリームをアートに置き換えるという、着眼点の面白さもさることながら、思わず触りたくなるような可愛らしさや、美術品としての気品を纏う存在感が作品の魅力だ。

坪山齊(つばやま ひとし) 坪山齊は仙台で生まれ育ち、東京藝術大学の油画を卒業。タイペイダグダイに出品。作品をよく見ると、地形図の等高線によって区切られた面を今度個性や特徴を消すかのように塗りあげている。その立体と平面とを行ったり来たりじっくりと見てみると、自然と肖像画のもつ個性が失われてゆき、なぜか外から眺めた風景のようなものを感じる。

佐々木敬介(ささき きょうすけ) 1993年生まれの佐々木敬介は、東京藝術大学日本画専攻に現役で入学し、2017年3月に大学院を修了した。全国美術大学奨学金日本画展の入選や三菱商事アート・ゲート・プログラムの複数回の入選、東京藝術大学安宅賞受賞など、大学在学時より多方面で評価されており、作家として早くも頭角を現している真の実力者だ。

杉田陽平(すぎた ようすけ) アート界の革命児として注目を集め続ける画家・杉田陽平。美大在学中から頭角を現した杉田氏は数々のアワードを受賞し、一躍、時代の寵児に。その後も着実に実績を積み、作品を精力的に発表。近年は抽象画に戻り、アクリル絵具の皮をカラージュした平面・立体作品を制作している。

石川美奈子(いしかわ みなこ) 石川美奈子の作品の真骨頂は、一本の細いアクリルで描かれた線とその配色を微妙に変えながら幾千にも並べられたその美しさにある。透明のアクリル板の上にレインボーカラーで作品を彩ったと思えば、白いキャンパスの上にブルー一色に描くといったように変幻自在に形を変えながら、グラデーションで見る人を魅了させていく。

新藤杏子(しんどう きょうこ) 「生物の営み」をテーマに表現するアーティスト。にじみを生かしたタッチで描かれる人物たちとその空気感は一瞬にして鑑賞者を作品世界へと引き込む。描かれているのは一見かわいらしい子どもものように見えるが、小説、マンガ、おとぎ話などの日本のサブカルチャーや、彼女自身の体験をもとに、現代におけるものあり方、人のかかわり、彼女の思考を表現している。人氣急上昇中であり、今後も作品価値が高まっていくであろう。

姉咲たくみ(あねざき たくみ) 建築学を専攻し、その一方で、独学でペン画を学んだ。独自の建築物を描いた作品は、驚くほど緻密な筆致と、驚異のイメージネーションから成り立っている。超未来建築の形態と物語についての制作と研究を行い、それらを作品として表現する一方、自らの作品をキュレーションする意欲的な展示も行っている。現在、東京を中心に国内、海外で活動。

コムロ ヨウスケ 幼い頃から絵を描くことに親しみ、アートやデザインを学び、アメリカ留学を経てグラフィックデザイナーに。その傍らアーティストとして、単純さと明快さを追求するスタイルで制作。表現はシンプルかつミニマルでありながら、具象性と理論性をもつ。アメリカでの生活や、世界各国の旅を通じて、西洋文化に大きく影響を受けた。東西のハイブリッドな要素とスタイリッシュさが魅力である。

榎本マリコ(えのもと まりこ) 日本画家であった祖母の影響もあり、幼い頃から自然と絵のある環境で育った。ファッションを学んだのち、独学で絵を描き、書籍装画やCDデザインなどで活躍している。ニューヨークなど海外でも精力的に展示し、人気を集める。人間と動物や植物が一体となった情景など、不思議でシュールな雰囲気を出した作品は社会の現実や、現代の人々の心境を映し出している。